優秀賞（京都府教育委員会教育長賞）

「関係ない」を「自分事」へ

南丹市立園部中学校
二年　津田　咲登

バングラデシュには、「関係ない」という言葉がない。

私は、学校の道徳の授業でそれを知った。もちろん、その言葉が存在しないという意味ではない。間違ったことをして注意されたときや、大切な問題が目の前にあるのに自分のこととして考えようとしない時に使う「関係ない」という言葉が、バングラデシュにはないという意味だ。

この夏、私は近畿ブロック少年少女北方領土研修に参加した。この研修には、近畿圏内の北方領土問題に関心のある仲間たちが集まっていた。私も「早く解決して欲しい」と心から思って参加したつもりだったが、根室から来ていた高校生の話を聞いて「なぜ解決しないのか」ということを考えていなかったことに気づかされた。

「根室市民であっても、若い世代ほど北方領土の問題に関心を持たなくなっている。」と、その高校生は話していた。その流れは日本全体でも同じことが言えるそうだ。

「自分たち自身が解決したいと思っていないのに、誰がこの問題を解決してくれるのだろうか。誰も困っていないのなら解決する必要はない。」と他の国の人たちは思うだろう。そして、そのことを元島民の方々はどんな思いで聞いているのだろうか。そんな気持ちになった。

一方で、こんな出来事を知った。平成三十年七月、西日本を襲った豪雨は大変な被害をもたらした。その時、日本に義援金を送ってくれた国の一つがカンボジアだった。その金額は約十五万円。カンボジアでは医者の月給が約二万円だから、そのお金がどれだけ貴重なのか十分にわかる。日本の被害はカンボジアの人たちには関係ないことだ。でも、かつて日本がカンボジアを支援したことを忘れていなかったのだ。日本の心にふれた人たちは、人ごとではない、関係ないと思わず、自分たちの生活を犠牲にしてまで日本に心を寄せ、助けようとしてくれたのだ。

この話を知り、「無関心」を「関心」に変えるのは人の思いにふれることしかないと思った。だから、私は、今の日本の人たちにも、ロシアの人たちにも元島民の思いにもっともっとふれて欲しい、もし自分がその立場ならどう思うか想像して寄り添ってほしい、そのことがこの問題を解決するために必要なことだと感じるようになった。

私は将来、教師になりたいと思っている。今、中学生のほとんどが北方領土のことを深く知らない。深く知らないから元島民の思いを知らないし、他人事になってしまっている。でも、その中学生を無知だと責めることはできない。なぜなら、そのような機会が少ないからだ。私も学校で先生の話や根室市の高校生の話を聞く経験ができたから深く考えられるようになった。だから、次は私が一人でも多くの人に、北方領土について考えられるきっかけをつくりたい。もし教師になることができたら、中学生たちに元島民の思いを伝え、人の思いにふれることができる人を増やして、人の痛みに寄り添い「他人事」や「関係ない」ではなく「自分事」とする中学生を育てたい。

優秀賞（京都市教育長賞）

「返還」と「引き渡し」

京都市立北野中学校
三年　大林　華

一つの出来事が起こったとき、それは様々な言葉によって言い表される。置かれた立場によって、一つの出来事は異なる言葉で語られる。たとえ似た言葉であっても、その言葉の意味は異なる。そういった食い違いは国際関係においても存在する。

北方領土問題、ここにも言葉の食い違いがある。日本人は長年、北方領土の「返還」を訴えてきた。これに対して、北方領土を実効支配しているロシアは、北方領土の「引き渡し」を考えているという。一見すると似た意味をもつように思えるが、お互いの国の北方領土に対する見解を表明するもので、これらは違う言葉である。

日本は北方領土を日本固有の地として、少しでも早い「返還」を求めている。一方、ロシアは五十六年宣言に記されるように、「引き渡し」に関しての問題であると捉えているのだ。お互いに立場によって北方領土の姿が違うのは当然だが、今の状態のように目指す方向性が違うことは問題だ。日本の言う「返還」には主権を含んでいるのに対し、ロシア側は、「五十六年宣言には、どちらの主権になるかは明記されていない」と主張している。ロシアには戦争で勝利したことによる正当な領土であり、日本に「返す」というより、「渡す」という認識があるようだ。結果として、北方領土問題における「返還」と「引き渡し」という言葉は、日露にとっては対義語のような意味をもつようになってしまった。これでは、いつまで経っても問題解決には至らないと思う。

それに加え、現在の日本は二島返還も視野に入れるようになっている。だが、果たしてそれでいいのだろうか。二島が返ってくることは、そこに住んでいた元島民にとって、喜ばしいことではあるが、返ってこなかった島に住んでいた元島民は、もっと苦しい思いをすることになるだろう。二島返還で話がまとまってしまえば、ロシアは、北方領土問題は解決済みだと考えるだろう。これでは返還されなかった二島が戻ってくることは、今以上に厳しいものとなってしまう。さらに、北方領土問題の解決を二島返還で終えることは、日本のイメージを大きく変え、日本は国際社会から法と正義を「あきらめてしまう国」だと思われてしまう。竹島や尖閣諸島をはじめとする主権や領土に関する問題に与える影響は計り知れない。

こうした北方領土問題の現状を知らない人は、四十歳未満では四割を超えている。これこそが、北方領土問題の解決を遅らせている最大の理由だ。返還を求めているはずの日本国民が、知らないようでは話にならない。だから、私たちが、まずやらなければならないことは、北方領土問題に関心をもつことなのだ。これで、やっとスタートラインに立つことができる。

折しも、ローマ教皇が三十八年ぶりに日本を訪れた。ローマ教皇の語る言葉の中に「無関心はいけない。」というのを聞き、私はハッとした。知らないままで放置することは、間違ったことだと気づいた。北方領土問題は遠い場所の問題ではなく、私たち自身の問題である。

また、中国政府への抗議活動が続く香港では、四年に一度の区議会選挙が行われ、投票には長い列ができた。その結果、民主派が中国返還後で初めて過半数の議席を獲得した。このような香港住民の自らの社会に対する熱い思いや関心の高まりに、私は圧倒された。ここには、香港住民のこのままではいけない、どうにかしなければならないという熱い思いと行動がある。

北方領土問題には、互いの解釈の違いなど、解決に至らない多くの課題はある。だからこそ無関心を止め、私たちはスタートラインに立ち、行動することを選びたい。そして、日本国民には、あきらめない心を持ち続けることが大切だと考えている。

優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞）

北方領土問題について考える

京都府立木津高等学校
二年　中嶋　実菜

日本とロシアが主張する国境にはズレがある。日本とロシアの間には長年解決に至っていない北方領土問題があるからだ。何十年にもわたって解決策が提示されているにも関わらず、なぜ解決に至らないのか、私なりに考えてみた。

まず両国の主張を歴史的観点から比較してみる。日本の主張としては江戸時代末期に結んだ日魯通交条約の中で歯舞、色丹、国後、択捉の四島が日本の領土であることをロシアも承認していること、樺太千島交換条約から見ても四島が日本の領土として承認されていたのは確かだということ、サンフランシスコ平和条約によって日本の領土が決定されたが、その条約にはソ連が不参加であるということなどがあげられる。

これらに対してロシアの主張は、四島は第二次世界大戦の結果としてロシアが獲得したものであるというものだ。しかし私はこの主張に違和感を覚えた。なぜならこの主張は第二次世界大戦後の世界平和回復のための基本原則を定めた大西洋憲章に矛盾するものだからだ。ロシアの主張は筋の通らないものだと感じた。

次にロシアが北方領土返還を拒む理由を考えてみる。その一つとして、日米安全保障条約が関係するだろう。アメリカとの関係が良好でないロシアにとって、返還後の北方領土に米軍基地が建設される可能性があることは危惧すべき問題である。もう一つはプーチン大統領の支持率が関係するかもしれない。資源大国であるロシアの収益は石油や天然ガスによるものが大半で、プーチン大統領の支持率もそれらの収益が基盤の一つであった。しかし近年、技術の発達によるシェールガス革命の影響でロシア経済は不安定になり、それに伴ってプーチン大統領の支持率も揺らぎ始めたのだ。低下した支持率を取り戻すためにも、北方領土返還を受け入れることはできないのだろう。

様々な問題が北方領土問題の解決に至るまでの障害になることは理解できたが、現状のままではいけないことも事実だ。

北方領土問題を少しでも先に進めるために私は提案したい。まず話し合う相手はアメリカであるということ。なぜなら返還後の領土に米軍基地を建設しないことに合意してもらう必要があると考えるからだ。さらには日本に領土を返還するということは、ロシアの弱さを示すものではなく、歴史的事実に基づいた英断であることを強調し、ロシア国民の同意と他国からの賛同を得るべきであるということだ。

この提案はあくまでも世界の政治に関して無知な一人の高校生の意見であり、実際に問題を解決するためには浅はかすぎる考えかもしれない。しかし日本国民の一人ひとりが当事者意識を持ち、関心の目を向けることもまた様々な問題を解決する上で絶対必要なことであると私は考える。

優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞）

あの日の会話から

京都市立春日丘中学校
三年　直井　咲良

「戦争でこの島を取り返すのは賛成ですか、反対ですか。」「戦争で。」「ロシアが混乱している時に取り返すのはオーケーですか。」「戦争なんて言葉使いたくないです。使いたくない。」「でも、取り返せないですよね。」「いや、戦争はすべきでない。」「戦争しないとどうしようもなくないですか。」こんな会話がテレビを見ていた私の耳に飛び込んできた。

これは、北方四島ビザ無し交流の訪問団の一員として国後島を訪れた日本維新の会の丸山穂高衆議院議員と元北方領土の島民であった団長の会話である。この会話を聞いてから、北方領土問題は北海道の人や北方領土に住んでいた人たちだけの問題ではなく、私たち国民の問題ということに気付かされた。それに気づいた私はまず、北方領土問題について知るために、インターネットで調べてみることにした。すると、北方領土問題は第二次世界大戦をきっかけにロシアに日本の領土を法的根拠無しに占拠されているという情報を得ることができた。戦争が終わって、七十年以上経っているというのに、北方領土は返ってこない。

美しい海と緑の自然に囲まれて生活していた日本人の姿を想像すると、胸の奥底から何かが込み上げてくるような気がして、仕方がなかった。もし、私が北方領土に住んでいた島民で、突然ソ連に島を占領され、故郷を追い出されたならば、故郷に戻ることのできない不安と悲しみ、辛さで押し潰されそうになるだろう。実際に住んでいた人たちも一日でも早く島を返して欲しいと思っているはずだ。返ってこなくてもいいと思う人なんて誰一人いないことだろう。しかし、北方領土は今、ロシアによる開発が進んでおり、昔のような美しい自然は少しずつ姿を消していっている。これを見た元島民は一体何を感じるのだろう。現在、ロシア人島民の九割以上が日本への島の引き渡しに反対している。このままでは本当に北方領土が返ってこなくなるかもしれない。

その為に私たち国民はより良い解決策を考えなければならない。今のところロシアとの話し合いは上手くいってはいない。何か良い方法はないのだろうか。私は考えた。しかし、私の固い頭では、そんなことは思いつかなかった。でも、解決するうえでやってはいけないことは分かった。島を求めて戦争をし、国や国民を傷つけてはならないということだ。

北方領土問題は先述の通り、第二次世界大戦がきっかけとなって起こってしまった出来事だ。なのに、これを戦争で解決できる訳がない。そして、戦争はたくさんの死者を出すことになってしまい、国と国との関係をさらに悪化させてしまう。戦争を起こして島が返ってきても、元島民が島に喜んで戻っていくのだろうか。いや、そんな訳がない。荒れ果てた島を目の当たりにした島民は、嘆き悲しみ辛い思いをしてしまう。過ちは二度と繰り返してはならないのだ。今、北方領土を返してもらう方法は思いつかなかった。でも、北方領土をもっと知ることで、何か良い解決策を思いつくのかもしれない。人生で一度だけでもいいから、元島民の方の話を聞いてみたい。知らなかったことを知って、良い解決策を考えたい。そして、納沙布岬から青い海に浮かぶ歯舞群島を眺めてみたい。その景色からたくさんのことを学びたい。感じたい。

私は、これから日本国民の一員として北方領土問題について、深く考えようと思う。そのために北方領土を知ること、元島民の方の話を聞くなどの経験をすること。この二つを心がけて少しでも日本の力になればと思う。いつの日か、「北方領土が返された」という喜ばしいニュースを聞くために。

優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）

北方領土をもっと近くに

舞鶴市立城北中学校
三年　高尾　悠冬

あなたは北方領土の現状をよく知っているか。この単純な質問に「はい」と答えられない人が現在日本国民の八割以上を占めている。僕は同じ日本人が七十四年前、悲惨な目にあい、今も苦しんでいる状況を一人でも多く知ってほしい。いや、知らねばならないのだ。

「北方領土」は北海道の東に位置する択捉島、国後等、色丹島、歯舞群島のことをいう。これらの島々は昭和二十年、第二次世界大戦終結後、日ソ中立条約を破って侵攻してきたソ連が占拠し、その状態は今も続く。侵攻当時、一部の島民は命からがら島から脱出し、残った人は捕虜として樺太の収容所で悲惨な暮らしを送った。

もし、自分の故郷が異国に奪われ、家族や友人が見知らぬ地へ連れていかれたらどうだろうか。僕なら、故郷を奪った国への憎しみでいっぱいになるだろう。そんな出来事が実際に日本で起こったのだ。

では、なぜ北方領土の現状をよく知らない人がここまで多いのか。理由はたくさんあると思うが、「他人事として考えている」ことが大きいのではないだろうか。実際に終戦から七十四年がたち、どうしても遠い昔のこととして考えてしまう。そして日本最北の地での出来事のため、距離的にも身近なものとして捉えにくいだろう。また、領土問題ということで「難しそう」や「政府が何とかしてくれる」などと、人任せにしてしまう部分もある。

どうしたら北方領土に興味を持ってもらえるか。知らない理由から逆算して考えてみると「身近なこと」として捉えるのが大切ではないだろうか。そのために三つの観点から北方領土を見てみよう。

一つ目は年月だ。ソ連の侵攻は七十四年前だが、今も領土問題は続いている。そのため、全国各地で返還の取り組みが行われている。また、実際にロシア人と交流することで友好関係を築こうとしている。そしてその集会や事業の多くが誰でも参加できるものだ。北方領土問題は遠い昔のことではないのだ。

二つ目は距離についてだ。大阪から歯舞群島の一つ、貝殻島までは約千八百km。七十四年前には最短で五十四時間かかっていたのが、十六時間で行ける。半日あればいつでも行けてしまうのだ。また、北方領土に最も近い根室市の納沙布岬から貝殻島までは、三・七kmという近さなのだ。

三つ目は資源だ。北方領土の周辺は海産物も豊富で、化石燃料も確認されている。戦前まではここを日本人が開拓し平和に住んでいた。もし北方領土が返還されれば、僕たちの暮らしが豊かになるのは間違いない。

このように、北方領土は僕たちの暮らしに直結する身近な存在なのだ。そしてこの問題を世界中からも身近に感じてほしい。ロシアと日本という大国同士が関わる問題は、他国に貿易でも軍事でも影響を及ぼしかねない。北方領土は日本国内だけでなく世界問題の一つなのだ。

昨年九月、日露首脳会談が行われた。過去何十回も会談が行われているが、大きな進展はない。このような状態に歯止めをかけ、政府を後押しするのは国民の「世論」なのだ。政府だけが問題を解決させようとしても無理がある。これからは僕たち若者が世の中を動かす世論をつくっていくのだ。日本だけでなく、世界を平和にしていくために。

優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）

北方領土返還と交流

京都市立桂川中学校
一年　島本　真衣

「北方領土ってなに。」

学校で先生から話を聞いた時に一番に思ったことでした。「北方領土」という語句は聞いたことはありましたが、自分には関係のないことだと思って、これまではあまり興味を持ちませんでした。

そして、帰宅してから母に何げなく「今日、学校で北方領土について学習した。」と話すと、母がインターネットに載っていたある記事を私に見せてくれました。その記事を読んでみると、知らない間に日本とロシアとの間で、元々は北方領土の島々に住んでいたのにも関わらず、先祖の墓参りにも行きたくても行けないなどの深刻な問題があるのだと改めて知り、とても驚きました。「もしも今、住んでいる日本が他の国の領土となり、他の国や地域に移住しなければいけなくなったならば」、「自分の住んでいた家にビザがなかったら入ることができなくなったならば」と想像してみました。そしてこれまでの記憶の中にある習い事の帰りに母と一緒に色々な話をしながら歩いた道、友達と一緒にいたずらをして怒られたり、一緒にたくさん笑ったりしていた学校、家のベランダから眺めた近所の風景。今まで私を支え、築き上げてきた人生の歩みを根こそぎ全部奪われてしまうという恐怖心や悲しみや怒りが私の心の中に湧いてきました。

私の読んだ記事の中には、北方領土に住むロシアの方の意見がありました。そこには、日本人も一緒に住んで仲良く暮らしていけば良いのではないかという声もありましたが、北方領土の返還についての聞き取り調査では住民のほとんどが返還に反対しているそうです。元島民と現住民がもっと交流を深め、より良い関係を築いていくことはとても重要なことだと思います。しかし、二度と故郷に戻ることなく、亡くなってしまった方たちの思いや悲しみは、それで解決することはできるのでしょうか。

私にはそう思えません。現住民の人たちが北方領土を返還したくないと思うのは、自分の住んでいる島々に愛着があり、愛国心があるからではないでしょうか。しかしながら私たち日本人にも同じように自分の故郷を大切にしたいという気持ちがあると思います。

私は今すぐに北方領土を返還するのは大変難しいことだと思いました。今後もロシアと日本との間で返還に向けた協議は続いていくとは思いますが、元島民の方たちが、もっと簡単にふるさとに足を運べるような方法を考えてほしいと思います。

そして、今後このような悲しい歴史が繰り返されないように願いたいです。これからは私も日本人の一人として、日本と世界との関わりについてもっと興味を持って学んでいきたいと思います。

優秀賞（京都新聞賞）

私の主張

京丹波町立和知中学校
二年　向仲　柚季

北方領土問題で、日本が今求めているものは何か。四島返還か？しかし「二島だけでも」と言っている元島民の方々もいるようだ。それならば何か。

私がこの問題について考えるようになったのは、元島民の中で二つの意見があることを知ったことがきっかけだ。四島返還を願う人、「二島だけでも」と少しずつ島の返還を願う人。一見、思いが分かれているように思える。だが私は「もう一度この地に立ちたい」という気持ちは元島民全員が持っているものだと考えた。しかし、こう考えた時の自分は、島が返されることを願うことしかできていなかった。

七十四年の月日が経った今でも問題が解決されない。これには二つの理由があるのではないかと考えた。

一つ目は、日本人にとってもロシア人にとっても「ふるさと」であるということだ。元々住んでいたのは日本人だ。だからといって今そこに住んでいるロシア人のふるさとを奪っていいのだろうか。こう考えると、より問題解決から遠のいていく感じがする。

だからこの問題を自分にとって、身近なものとして意識できるように、北方領土について調べた。すると二つ目の理由と思われる情報を見つけた。それは「歴史認識の違い」だ。日本人は「突然奪われた」と思っている。だがロシア人は「戦争に勝って手に入れた」としている。この歴史認識の違いにすごく驚いた。この違いをこのままにしておいていいのだろうか。整理しなおすべきなのではないか。それが問題解決の一歩になると思う。

こんなふうに語っている自分だが、実は今まで北方領土について何も知らなかった。それはこの問題を他人事として、知ったり触れたりしようとしなかったからだ。だから長い間解決されていないことやたくさんの人々の気持ちが犠牲になっていることを知って、すごく残酷だと思った。それ以上に元島民の方々は、苦しく悲しい、そして怖い思いをされたのだろう。そして今もこの思いを持ちながら生活されているのかもしれない。それが一番つらいことだ。

このような人たちが苦しみから解放されるように、よりよい未来が来るように、そして北方領土問題が解決されるように、自分のこの小さな力でできることは何か。それは様々な機会に「四島返還をあきらめない」と主張することである。中学生の自分の力はすごく小さい。けれど、多くの人の力を合わせれば大きな力になる。だから元島民の方々、解決したいと思っている方々とともに全員で主張しようと思う。

北方領土問題に触れるきっかけとなったこの機会に、私はすごく感謝している。たくさんのことを知った今では、この問題を忘れてはいけないと強く思う。まだ間に合う。一歩を踏み出してみよう。この問題に触れて気づいたあなたの意見が、解決への一歩にきっとなる。

優秀賞（京都新聞賞）

北方領土の現在と未来を考える

京都市立嵯峨中学校
二年　河西　航

「工場新設、進むロシア化」「日本漫画『大好き』少女も」これは、今年の九月十六日の京都新聞に掲載された国後島と色丹島へのビザなし交流について書かれた記事の見出しだ。私は昨年北方領土作文を書いて北方領土に関する記事を切り抜くようにしていた。切り抜いた記事の中で最も心に残っていたのが、このビザなし交流についての記事である。

この記事には、二島では公共施設や工場の新設といった「ロシア化」が急ピッチで進み、実効支配が強まっているということや、二島の合計人口は約一万二千人で、本土よりも高い給料で若い人たちを呼び寄せ「若返り」を図っているということが書かれていた。私は、現在の北方領土には、戦前の日本人と同じくらいのロシア人が住んでいるという事実に驚き、今後北方領土の「ロシア化」が進むほどに北方領土の返還は難しくなるだろうと考えた。

また、この記事で特に印象的だったのは、国後島に住む十六歳の少女は日本の漫画が大好きで、将来はロシアと日本をつなぐ仕事に携わりたいと語っていたことだ。私は今までロシア人と交流したことが無いためロシア人には少し取っ付き難い印象があったが、私も漫画が大好きなのでその少女には親しみが持てた上、北方領土に住むロシア人が日本に対して好意的な印象を持ってくれていることは嬉しかった。

そして、妻が元島民二世という日本人男性が「今の島民にも幸せに暮らす権利がある。」と話していたことも心に響いた。北方領土が日本固有の領土であることは明らかで、元島民の方のためにも一刻も早い返還が望まれるが、現在幸せに暮らしているロシア人に島を去ってもらい、再び日本人が島で暮らすということは現実味に欠けると考えた。

このようなことから、私は北方領土で日本人とロシア人が互いを尊重し合いながら共生し、北方領土の資源を両国が分かち合うことが理想だと考える。北方領土がロシアに占拠されてから七十年以上が経過し、現在もロシア側が北方領土はロシアの主権下であると日本が認めない限り、交渉の前進は難しいと主張している以上、日本が多少なりとも歩み寄る必要があると考える。もちろん北方領土での共生には、多くの政治的・経済的な課題があるだろうが、高齢化が進む元島民や島民二世の方のためにも、平行線な議論ではなく有意義な交渉と北方領土問題の早期解決が必要であると考える。私の考えが正しいかどうかは自分自身でも分からないため、今後も北方領土に関するニュースに興味を持ち、考えを深めるとともに、日本人として北方領土問題に向き合い続けたい。

優秀賞（ＫＢＳ京都賞）

とっても近くて遠い場所

京都府立洛北高等学校附属中学校
二年　只友　明徳

学校で、北海道の納沙布岬から撮った北方領土の写真を見てとても驚いた。北方領土の歯舞群島が見えるではないか。こんなに近いところにあるのか。ロシアに占領されていることは知っていたため、とても遠いところにあるように思っていた。船ですぐにでも行けそうなところにあるのに、見えない壁が遮っていた。

北方領土の問題が生じた理由は、ポツダム宣言の受諾と調印の間に期間が空いてしまったことだ。日本側は受諾した日が終戦という考え方に対して、ロシア側は調印されるまで戦争は続いているという考えであるため、その間に占領された北方領土の帰属が曖昧になってしまった。

そして元島民の方々の先祖の墓は北方領土にあるため、現在墓参りもできない方も大勢いる。生まれ故郷に帰りたいと思う人がいるのは当然のことである。さらに土地も広く、排他的経済水域も重要である。カニなどは乱獲により日本近海での漁獲量が減っているものもある。北方領土は様々な問題を抱えているのだ。

そこで私たち中学生には何ができるか。仮に今日本に返還されたとする。しかし択捉島などに住み続けるロシア人は多いと思う。彼らも昔の我々と同様に住んでいる地域から離れたくないはずだ。無理矢理追い出してしまっては、昔のロシアがやったことと同じ事になってしまう。北方領土をこれ以上対立の象徴にしてほしくない。

それでは私たち中学生には、具体的にどのようなことが考えられるであろうか。それはどちらの国の領土にもしない、中立地または共同管理地とすることである。お互いが一歩下がって協力するのだ。そのような場所は世界でも例を見ないが、だからこそ平和の象徴としての価値が北方領土にはあるのではないか。日本人でもロシア人でも国籍に関係なく暮らせる共同管理地になれば平和の象徴となるだろう。共同管理地とすることによってお互いにメリットがあるのではないか。日本は北洋の魚が捕れるようになる。魚介類消費量が世界有数の日本にとって決して悪い話ではないはずだ。また今回の授業で、北方領土には病院などの施設が整っておらず、島民の方は大変であるとわかった。日本が医療サービスを提供することも可能ではないか。

今、多くの中学生がこの問題の解決策について考えているだろう。しかしこの問題は我々だけでなく、世界中の人に一緒になって考えてもらいたい。これ以上悲しい思いをする人が出ないように。対立の象徴が平和の象徴に変わるように。

優秀賞（ＫＢＳ京都賞）

北方領土問題のメリットとデメリット

京都市立下京中学校
二年　大槻　莉央

北方領土とは、択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島のことです。北方領土は、これまで日本の人々が開拓して受け継いできたもので、一度も外国の領土となったことがありません。しかし、第二次世界大戦によって、この考え方は大きく変わったと思います。戦後は、ソビエト連邦によって占領されて、現在の状況に至っています。そして、日本側の返還要求に対して、ロシアは強硬な姿勢で臨んでいます。

そこで、北方領土を返還してもらえないとどういうことになるのかを考えてみました。それは、漁業についてです。漁業は、この問題に大きく関わっていると思います。私のおじいちゃんは、漁師をしています。漁師にとって漁場がどれだけ大切なものなのかが、私には少しわかります。北方領土が返還されず、漁場の範囲が狭くなることで、魚の獲れる量が減るのです。

戦前は、島の人々が協力して、漁業をしていただろうと思います。島には、水産資源を缶詰などにする加工工場が建てられていたと思います。そのような漁業の恵みは、北方領土を豊かな町にしていたはずです。

一方で、返還後、漁獲量の制限を無くすと、日本が多く獲ることになるので、それも問題になると思います。外国船も含めた乱獲の恐れも出てくるからです。

ところで、北方領土について、知らない人はとても多いと思います。私たちができることは、限られています。このような作文を書くことで、世界の人たちが見たり、知ったりすることで、考え方は変わるかもしれません。また世界の人を招くための観光スポットを作っても良いと思います。世界の人々に北方領土を知ってもらい、私たちの気持ちを広めることで、メリットも増えると思うし、その思いの広がりと強さが返還につながると思います。

ただし、インターネットで、北方領土の様子を見てみると、観光資源が、完全にあるとは言えませんでした。そのため、観光に来る人は、少ないと考えました。

また、返還後に、北方領土に住んでいた人たちが戻ってくるのも少ないと思います。戦前の島民は、高齢になっていると思うので、移り住むことができる人は限られるでしょう。他の日本人を、北方領土に移住してもらうことも考えられると思うけど、それもほぼ不可能だと思います。まだ北海道は、土地も広く、余っていると思うので、北海道で暮らそうとする人が、北方領土に移住すると思いません。

色々な問題も考えられますが、返還されたら争い事のないように平和になればいいと思います。